

歌唱教材の「Authenticity」をめぐる歴史的考察

- 中学校の音楽教科書の分析を中心として -

教科・領域教育専攻

芸術系コース(音楽)

齊藤 昇

1 研究の動機と目的

音楽授業では、教科書に収録された教材が主として用いられる。現行の教科書を眺めてみても、そこに教材として取り上げられている曲は、古今東西の多種多様なジャンルに亘っている。歌唱教材として教科書に取り上げられているものの中には、歌詞が省かれたり、旋律が簡略化されたりして、オリジナル作品とは違う姿に書き替えられているものがある。また、もともと管弦楽曲であったものがピアノ伴奏つき合唱曲になったり、ピアノ独奏曲であった旋律に歌詞が付けられクラス全員で斉唱するための歌曲になったりしている。何故教科書において音楽作品はオリジナルの姿のまま存在することができず、替えられた姿で身を置かねばならなかったのだろうか。

このような背景には教科書の教材における「Authenticity」の軽視と言うべき問題があるように思われる。「Authenticity」軽視の問題は十分に議論されることなく今日に至っている。これからの音楽教育における教材のあり方を考えていく上で、「Authenticity」軽視の実態を探るとともに、その原因を究明することは重要な課題であると思われる。

なお、本研究では「Authenticity」という言葉を「音楽作品としての真実の姿」という意味で用いた。

2 論文の構成

1 序論

1.1 研究の動機と目的

1.2 先行研究

1.3 研究の概要

2 戦前の音楽教科書教材と「Authenticity」

2.1 明治期

2.2 大正期

2.3 昭和前期

2.4 昭和戦時期

2.5 まとめ

3 戦後の音楽教科書教材と「Authenticity」

3.1 戦後教科書の分析

3.2 昭和 20 年代

3.3 昭和 30 年代

3.4 昭和 40 年代

3.5 昭和 50 年代

3.6 昭和 60 年代～現在

3.7 まとめ

4 結論

4.1 まとめ

4.2 音楽科教育における教材

4.3 音楽科教育における「Authenticity」重視の意義

4.4 今後の課題

3 戦前の音楽教科書教材と「Authenticity」

ここでは明治期から第2次世界大戦までの期間

に文部省から発行された小学校の音楽教科書を分析の対象とし、そこに取り上げられている歌唱教材と「Authenticity」の問題について考察した。

明治 12 年に発布された「教学聖旨」は、学制公布以降の知育に偏った教育を批判し、仁義、忠孝を中核とした道德の教育に重点を移すべきという内容を示したものであった。この「教学聖旨」を中核とした教育観は、第 2 次大戦終了まで我が国の教育を長く支配していた。唱歌においては、メロディがどうであるかということとはほとんど問題にされず、歌詞の内容が重視されていた。メロディは歌詞の中に散りばめられた教訓、さらに言えば国策を子どもたちに伝達するための手段となっていた。「徳性の涵養」や「国民的情操の淳化」が重要視され、「Authenticity」はどうでもよいことであったが、芸術作品として扱われているものであったのなら本来ありえないような歌詞の書き換えやメロディの改変がいとも簡単に、幾たびも行われた。《かぞへ歌》のように 5 回に亘って歌詞が変えられたものや、作詞の都合上、曲のタイトルまで変えられてしまったものまであった。この時期に教材における音楽作品の「Authenticity」を歪めていたものは「徳性の涵養」や「国民的情操の淳化」という国策であったといえる。

4 戦後の音楽教科書教材と「Authenticity」

ここでは、昭和 22 年に文部省が発行した中学校用の暫定教科書と、昭和 24 年以降に発行されている民間の音楽教科書を考察の対象として、第 2 次大戦後から現在までの歌唱教材の変遷を辿った。特に中学校 3 年生用の歌唱教材の傾向をつかむために、原曲のジャンル、編曲のタイプ、歌詞の形態等の「Authenticity」に関わる項目について調査を行った。それにより、教科書の中には外国曲が減って邦人作品の数

が増加していること

- ・編曲 作品よりもアレンジされていない原曲の数が減っていること

- ・「替え歌」が減って原曲の詞がそのまま教科書に載せられるようになったこと

- ・教科書のために新しく書かれたオリジナル作品が増加したこと

が明らかになった。終戦直後の教科書には、外国のクラシック音楽や民謡を題材とした歌曲や合唱曲がほとんどであったが、次第に教科書のために作曲された邦人によるオリジナルの歌曲や合唱曲がさかんに作られるようになり、その割合を高めていった。しかし、戦後においても「教育的配慮」の名のもとに改作が行われている。教科書では歌詞や旋律が書き替えられた教材がまだいくつも取り上げられていることから、音楽作品の「Authenticity」は決して重視されているとはいえない。

5 まとめ

音楽科教育において、主たる教材となる楽曲は、作品として歴史的に高く評価され、芸術的にすぐれたものが選ばなくてはならない。教材の質は授業の質を決定づけてしまう。真実の姿としての音楽は、リアリティを持ち、子どもたちの魂に直接働きかける力を持っている。これまでむしろあまりかえりみられることのなかった「Authenticity」が、今後、音楽科教育において重視され、質の高い教材がさらに開発されていくことを望みたい。

指導教官

小川昌文